Osaka Shoin Women's University Repository

篝火にたちそふ恋の煙

西木忠一

このごろ、世の人の言ぐさに、内の大殿の今姫君と、事にふれつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして……(注1)

と語り出される篝火の巻は、『源氏物語』五十四帖中もっとも短い巻である。本巻について、かつて藤田徳太郎氏は

庭に篝火、殿には合奏といふ所に、初秋らしい気分が現はれてゐる。其れ以外には何の意味もない巻である。(注2)

と酷評され、重松信弘氏も「要するに存在のかげの最も薄い巻ではある」(注3)と同様に評された。だが一方、池田亀鑑氏は、

地位といひ、年齢といひ、教養といひ、も早や盲目的な感情に生きることのできない男性のさびしさを、心にくいまでにゑがいてゐる。(注4)

と賞讃されたのである。

篝火の巻の構成は

(1) 近江の君の噂に対する光源氏の批評
(2) 光源氏と玉鬘との篝火のもとにおける歌の贈答
(3) 兄弟の奏楽に心打たれる玉鬘

と三段構成になっており、三十六歳の光源氏の断ち難い下燃えの恋情を、篝火に託して訴える(2)にこそ本巻の中心がある。

本稿は篝火の巻の『源氏物語』における存在意味をめぐって考察するものである。

一

常夏の巻において三十六歳の光源氏が、「大臣の外腹のむすめ尋ね出でてかしづきたまふ」はまことかと弁少将に尋ねたのは、「いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ」折のことであったという。

光源氏が玉鬘を六条院に迎え、若い貴公子達の憧憬の的として暮

Osaka Shoin Women's University Repository

らさせているのを妬む内大臣が、われも負けじと探し求めたのが「外腹のむすめ」ということで、内大臣の態度を嘲笑気味の光源氏は、

　朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ

とまで言い放つ。彼の嘲笑には厳しい毒があった。

この光源氏のあざけりを耳にした内大臣の腹立ちは並々ならず、内大臣は「外腹のむすめ」近江の君を弘徽殿女御のもとにあずける。少しは都の女性らしき教育をとの父親としての切実な願いによる処置であった。

常夏の巻は弘徽殿女御と近江の君との対面の場を、「さし過ぐしたる事もあらむかし」と、近江の君の出すぎた態度を読者に予告して巻を閉じた。

続く篝火の巻は、内大臣の近江の君の処置を太政大臣光源氏が批判するところから幕があがる。

内大臣の「外腹のむすめ」を近江の君と命名したことについて、『紫式部集』に見える近江守の娘の投影とみる説(注5)、また「紀記の編纂の時の生々しい事件としての近江朝の敗者の魂」を彼女は「背負ったのではないか」(注6)との説が見えるが、稲賀敬二氏が前者について

　「舌疾き」、「さがな者」で、「妙法寺の別当大徳」につながりのあるモデルが見つからぬ限りは、彼女の命名の由来をこのあたりに求めることが妥当な線であろうか。(注7)

と述べておられ、私もほぼこの辺であろうと考えている。

さて、篝火の巻の近江の君の登場も、常夏の巻と同様に世間話を小耳にはさんだ光源氏を通して語られる。

　このごろ、世の人の言ぐさに、内の大殿の今姫君と、事にふれつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、「ともあれかくもあれ、人見るまじくて籠りゐたらむ女子を、なほざりのかごとにても、……

と物語ははじまるが、そこに見える光源氏の発言「人見るまじくて籠りゐたらむ女子」は、のちに再度同様の思考経路を辿ることがある。それは柏木の巻の薫誕生の条である。今度の女三の宮腹の子が、女であれば深窓に育つゆえ不義の子とは世に知られずに成長することも望めようが、男ゆえに世に出るために世人の前に姿をさらす機会多く、秘密を察知されそうだと困惑する場面である。

こうした当時の常套思考に則って光源氏は内大臣の態度を咎める。それは

　いと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。

とあり、「今姫君」への光源氏の同情と化したのであった。

これが玉鬘に現在のわが身の在り方に安堵することを覚えさせることになる。作者はこの点にこそ本段の主眼を置いている。光源氏には「憎き御心こそ添」ってはいるものの、無理強いもしないところに、却って玉鬘の警戒心を弛緩させることになっている。このような玉鬘の心に起きたいささかの変化が、次の第二段を語り出すための充分なる準備として、その効果を見せている。

Osaka Shoin Women's University Repository

玉鬘の心の変化なくして
　秋になりぬ。

と語り出されて、篝火のもとでの光源氏と彼女との歌の贈答がなされたならば、読者は唐突感を抱くことになろう。

作者は玉鬘の心の変化を克明に辿って来た。

この年の正月元日、光源氏は玉鬘のもとへも年賀に訪れたが、その時玉鬘は

かくいと隔てなく見たてまつり馴れたまへど、なほ思ふに、隔たり多くあやしきが、現の心地もしたまはねば、まほならずもしなしたまへる

のであった。同様の赴きは胡蝶の巻・常夏の巻にも散見したのであった。

光源氏が玉鬘に接近の姿勢を採り歌を詠みかけると、玉鬘は拒絶はしないものの、心の扉は厳重に閉じることを決して忘れてはいなかった。そんな彼女の姿勢が徐々に軟化しはじめる。こうして作者は若き貴公子達の憧憬の的である「玉鬘」の、女性としての成長を徐々に徐々に語り上げて行くのであった。

玉鬘には迷いもあれば苦悩もあった。だが、その過程を経ることが彼女が生きていくことでもあったわけである。

二

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、……

と第二段冒頭は「初風」をもって語りはじめられる。光源氏は忍び寄る秋の気配に「うらさびしき心地」し、度々西の対へ渡った。「いとしばしば」と語ることで「五六日」の経過したことをここで作者は示す。

物語は「夕月夜はとく入りて、すこし雲隠れ」れ、「荻の音もやうやうあはれなるほど」に、光源氏が

御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。

とのことを語り続ける。このことに関して玉上琢弥氏は

「琴を枕に」とは風流だが、美人も一緒とは風流の極だ。それにしても、これっきりとは、考えられない話である。年ごろの女が、男に顔を見せ、そばに寝て、しかも何事もない。こんな話はあるものではない。(注8)

と評され、加納重文氏は

いささか衝激的な言葉も恐れないでつかうなら、これはすでに情交に近い。(注9)

とまで述べられたところである。この種の光源氏の行為は、次の野分の巻にも見ることができる。そこには

柱がくれにて、すこしそばみ給へりつるを、ひきよせ給へるに、御髪のなみよりてはらはらとこぼれかかりたる……

とあって、作者が女性ゆえに髪の美しさを描くことで、ますます燃えあがろうとする光源氏の情念を思わせる条である。

さて、玉鬘に「添ひ臥し」つつも、光源氏の心は自分の行為を冷

Osaka Shoin Women's University Repository

静に凝視している。それは「かかるたぐひあらむや」に見える光源氏の思考であって、これほどまでに玉鬘に執着しつつも、それを越える行動に出られないという自分自身を、彼は嘲笑のうちに眺めていることで納得できよう。

彼はすでに胡蝶の巻で玉鬘に愛情告白を行っていた。それは「雨のうち降りたるなごりの、いとものしめやかなる夕つ方」のことだった。亡き夕顔の面影を娘玉鬘に重ねた彼は、

橘のかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな

と詠んで彼女の手をとらえたが、女は、

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

と返歌して、「むつかしと思ひてうつぶしたまへる」のだった。その折の玉鬘は「いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげ」であった。それが却って光源氏には強い刺激となる。玉上琢弥氏が、

取り押えたその手は白く、ふっくりと、柔らかくて、いよいよ手放せなくなるのである。引き寄せた女の姿態、夏の装束を通して見る皮膚、源氏の目にも合格である。若さの美だ。ここまで近づいて、心は安まるどころか、あやにくに男心はさそわれる。今日こそは、今まで我慢に我慢した心の中をすこしでも伝えようという気になる。(注10)

と、見事にその場の状況と光源氏の心を評されたが、こうした事実がすでに二人の間にあったのである。

そして、今また男心の燃えさかるさまを物語は語る。

光源氏には「人の咎めたてまつらむこと」に拘泥するところがある。だから彼は「渡りたまひなむ」との行動を採ろうとする。ここで閉じれば特に味のない一巻となるのだが、そこに「御前の篝火のすこし消え方なる」舞台装置が利用された。「人の咎め」を思うゆえに光源氏の玉鬘思慕の情念は「すこし消え方」になったわけである。しかし、情念の炎は再び燃えあがる。それは彼がいよいよ「渡りたまひなむ」として篝火に点火を命じたことによって知ることができる。こうして、篝火の燃え立つさまに光源氏の情愛を重ねて作者は語るのであった。

点じられた篝火に浮かび上った玉鬘の姿は見事な見映えである。抑制しきれなくなった男は女の髪を撫で慈しむ。

御髪の手当りなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したる気色、いとらうたげなり

と見え、その時の玉鬘の姿は「らうたげ」な美しさを漂わせる。「御髪の手当りなど、いと冷やかに……」とは、いかにも生身の女性を感じさせる語りぶりで、冷たい手触りがとりわけ官能的である。

光源氏が、

篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

と詠めば玉鬘は

行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

と返歌する。光源氏の「篝火に……」の歌に続く彼の発言

いつまでとかや。ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり

Osaka Shoin Women's University Repository

は、諸注が明示するごとく

夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下燃えをせむ

（古今、恋一、読人しらず）

を引歌としていて、いつまで待てというのかと詰め寄る光源氏の気力が、読者に直に伝わって来る。対する玉鬘の「行く方なき……」の歌には困惑する女心を表現していて、拒む姿勢が明白である。因みに『源氏物語』に見える「篝火」の用例を見ると、篝火の巻の

① ……御前の篝火のすこし消え方なるを、御供なる右近大夫を召して……

② 篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

③ 行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

④ 御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火にとどめられてもの」とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。

の四例の他に八例（「篝火ども」も含む）を数えるが、中でも薄雲の巻の（明石の上）

「いさりせし影わすられぬかがり火は身のうき舟やしたひきにけん

（光源氏）

思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば

「あさからぬしたの思ひをしらねばやなほかがり火のかげはさわげる

誰うきもの」とおし返し恨みたまふ。

の二例中の、特に光源氏の歌に見える「かがり火」は二句目に「したの思ひを」と詠み込むごとく、光源氏の胸の奥深くに潜む明石の上への強い愛情をいう。この光源氏の歌は『古今和歌集』恋二（読人しらず）の歌、

篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり

を踏まえており、この時の彼の心情を静かに、それでいて軽い恨みを込めて詠みあげていて、篝火の巻に見える玉鬘への光源氏の「下燃え」の情念に通じるものがある。そこには当然のことながら三十六歳の光源氏には、薄雲の巻当時（二十九歳）の彼と違って、中年男性としての淫靡ともいうべき要素が多分に感じられるのであるが。

光源氏と玉鬘との初対面は光源氏三十五歳十月（玉鬘の巻）であった。「わりなく恥づかしければ、側みておはする様体など、いとめやすく」見えた玉鬘を、光源氏はその折「うれし」と素直に感じていた。玉鬘の歌

数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ

を見た光源氏は「手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちゐ」たと物語は語っていた。

だが、翌年光源氏三十六歳の初夏四月あたりから玉鬘への恋情に変容しはじめる。その状態は同年十二月の「大原野行幸」（行幸の巻）まで続いていく。だから、光源氏の三十六歳は玉鬘に情念の炎を燃え上がらせながらも、その一方ではその心を制御しつつ呻吟する年齢だったのである。

物語は、光源氏が胸奥の下燃えの思いを見せる場面を終えて、彼が西の対を出ようとする場へ転換をはかる。折から東の対の方から

Osaka Shoin Women's University Repository

「おもしろき笛の音」と「箏」の合奏が聞こえて来る。あまりの美しい音色は彼の足をしばし止めさせた。そこでの

中将の、例の、あたり離れぬどち、遊ぶにぞあなる。頭中将にこそあなれ。いとわざとも吹きなる音かな

との光源氏の発言には、玉鬘を惹きつけて離さぬ内容が盛られている。「おもしろき笛の音」は頭中将の「吹きなる音」らしく、彼は蔵人頭兼中将の、玉鬘の異母兄「柏木」である。柏木の笛の音に玉鬘の心が吸い寄せられたことは当然のなりゆきであった。

三

西の対の光源氏のもとに、源中将夕霧・頭中将柏木・弁少将の三人が東の対から参上した。光源氏は和琴を「なつかしきほどに弾き」、夕霧が「いとおもしろく」笛を吹く。「なつかし」と「おもしろし」に二人の人間性が思われる。三十六歳と十五歳の違いであろうか。血の繋がりを知らずに玉鬘を意識する柏木は、いささか緊張の面持ちにて容易に声も出ず、弟の弁少将が「忍びやかにうたふ」が、その声は「鈴虫にまが」うばかりであるとの由。光源氏が歌わぬ柏木に和琴を譲ると、彼は父内大臣の力量に「をさをさ劣らず、華やか」に弾く。

こうした貴公子達の奏楽を簾中にて聞く玉鬘の胸中はいかばかりであったろう。彼女を

絶えせぬ仲の御契り、おろかなるまじきものなればにや、この君たちを人知れず目にも耳にもとどめたまへど、

と物語は語り、「目にも耳にもとどめ」る玉鬘と、それを知らぬ男性たちの「思ひ寄らず」の状態と、そんな中で一人ひそかに胸わきたつ思いで満たされる柏木とを語って、篝火の巻は幕を降ろすのである。

常夏の巻で今姫君（近江の君）に手古摺る内大臣を語ったのを継承して、篝火の巻第一段は彼女の噂を小耳にはさんだ光源氏の批評から語り出された。この話題は次の野分の巻末での内大臣の

いと不調なるむすめまうけはべりて、もてわづらひはべりぬ

との弱音に対する大宮の

いで、あやし。むすめといふ名はして、性なかるやうやある

と、「あなたの娘に不出来な子はいない筈なのに」と答える箇所に続く。

また、同じ内大臣の娘玉鬘に関しては本巻第二段から第三段に続き、行幸の巻頭で玉鬘の処置に苦慮する光源氏が語られた後、いよいよ彼女の身がおさまりをつけるようになる。それは同年十二月の大原野行幸において、玉鬘が帝・父内大臣・右大将を目にするところを経て、到達する話だったわけである。

つまり、篝火の巻は三十六歳の光源氏が、玉鬘をめぐって中年男性の情念のほむらが、徐々に転回しはじめる姿を描く巻でもあったのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

四

ともすれば冗漫との謗りをも恐れず、物語の展開を絡ませながら篝火の巻を考察して来た。それは本巻のみでは真の意味を見出すことが困難だとの判断によったからである。

確かに一巻としてみるとあまりに他の巻々に比して短小であり、物語展開の時間から見ても、中心は一夜に焦点をあわせて語られていて、本稿冒頭に示した藤田・重松両氏のごとき否定的批評も甘受せざるを得ないであろう。だが、玉鬘の巻にはじまり、初音・胡蝶・蛍・常夏と続く一連の玉鬘物語における一巻として篝火の巻を考えると、巻の長さとは裏腹に見事に三十六歳の光源氏の心奥にくゆる中年男性の情念を、篝火に託して描き上げているといえよう。

常夏の巻で

月もなきころなれば、燈籠に大殿油まゐれり。「なほけ近くて暑かはしや、篝火こそよけれ」とて、人召して、「篝火の台一つ、こなたに」と召す。

と語られた篝火が、今夜も燃えている。「け近くて暑かはし」ゆえに燈籠を避けて篝火を用意されたのだが、作者はその時に光源氏の「下燃え」の思いを語らず、次巻篝火を用意して、彼の情念の火の燃え尽きぬ苦しみを語ったところに、私は物語作者としての手腕の見事さを見る。光源氏の心情と合致したすぐれた篝火の登場であるが、そうした例は『源氏物語』中にて数多く指摘することができる。たとえば若紫の巻の

人なくて、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ

と語り出される紫の上発見の条は、

「三月の晦日」である。京の桜の満開はすでに過ぎていたが、山の桜はいまだ満開だという。「わらはやみ」の為に熱っぽく、どことなく気だるい。しかも時は夕暮れだ。主人公も季節も、そして周囲のかもす雰囲気も、見事な一致を見せた舞台の設定である。(注11)

とすでに私は述べたところであり、賢木の巻の

はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて……

と語られる嵯峨野を辿る光源氏の心と自然との融合については、

秋の花は枯れ衰え、浅茅が原も枯れゆき、嗄れ嗄れの虫の音が聞えるのだ。……虫の声が全く嗄れ尽きたのではない。嗄れ尽きる一瞬手前の時期なのだ。そしてまた豊穣の秋が終わりを告げたのではない。終わりを告げる一歩手前の秋なのである。いまにも終わろうとする寸前の時を捉えて、「時」を設定した。それは六条御息所と光源氏との関係をも暗示していて、心憎い。(注12)

と述べておいたところであって、作者の場面設定の見事さは筆舌につくしがたいものである。

Osaka Shoin Women's University Repository

次に、三段構成をとる本巻の各段における引歌を列挙して考えてみよう。

① 初風涼しく吹き出でて、背子の衣も……
・わが背子が衣の裾を吹き返えしうらめづらしき秋の初風（古今・秋上・読人しらず）
・はつ風の涼しくもあるかわが背子が衣のうらのうらもさびしき（河海抄）

② いつまでもとかや。ふすぶるならでも……
・夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下燃えをせむ（古今・恋一・読人しらず）

③ 風の音秋になりけりと……
・秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（古今・秋上・藤原敏行）

の以上三箇所に引歌が見えるが、第一段は引歌なく、第二段に二箇所・第三段に一箇所となる。

また、すでに小町谷照彦氏ご指摘[注13]のごとく、「夕月夜」「荻の音」「檀」などの歌語を続々と登場させている。同氏が、

篝火巻は『源氏物語』でもっとも短い巻であるが、玉鬘に対する光源氏の情念と懊悩の姿を歌語を駆使して映像的感覚的に具象化した、特異な文体と方法を用いた独自な巻である。[注14]

と述べられたが、特に第二段・第三段（とりわけ前者）にこそ相応しい評である。中でも第二段の描写は秀逸であって、

初秋、暗夜の篝火は中年の源氏の恋情の象徴である。迫りくる秋の気配のなかで、ふともらす源氏の述懐にも、玉鬘の運命の転換を予兆しているようである。

との『日本古典文学全集』評（小学館・(3)二五一頁）は納得させられる。

初秋ゆえに篝火が燃え尽きて消えてゆくのも程なくである。当然にして時の流れがその時を呼び寄せる。光源氏の玉鬘に対する恋情も、程なく消え落ちるとともに白々と煙が立ちのぼり、あとは暗夜の闇に溶け込んで行く。そうした時は、もうそこに迫っている。その時こそ、光源氏の手中から、玉鬘が一人立派に人生を辿りはじめる時なのである。

作者が初秋の篝火を物語の舞台に大なる役割を荷わせて登場させたところに、私は作者の才のあまりの非凡さに驚きをかくし得ないのである。

（注1）本文引用は『日本古典文学全集』（小学館）によった。
（注2）『源氏物語綱要』（一一四頁）
（注3）『源氏物語の構想と鑑賞』（三五七～三五八頁）
（注4）『新講源氏物語』下巻（五一頁）
（注5）目加田さくを「近江君――風土的形成の特殊事情」（『源氏物語論』）
（注6）阿部好臣「近江君の位置と役割――源氏物語の神話的構造から――」（「中古文学」第二十四号・昭和五十四年九月）

Osaka Shoin Women's University Repository

（注7）「近江の君登場」（『講座　源氏物語の世界』巻第五・一八三頁）

（注8）『源氏物語評釈』巻第五（四二九頁）。ただし、「それにしても」以下改行している。

（注9）『源氏物語の研究』（四二九頁）

（注10）注8参照（二七二頁）

（注11）拙著『源氏物語論考』（一八一頁）

（注12）注11参照（一九八頁）

（注13）「光源氏と玉鬘(2)」（『講座　源氏物語の世界』巻第五）

（注14）注13参照（二一四頁）